

第7章 まとめ

調査の結果、名和飛田遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明した(表26)。ここでは、時代を追って調査の成果をまとめる。

1. 縄文時代

遺構は土坑がわずかに見られる程度であったが、遺物の出土量は極めて多い。最古の土器は押型文土器で、わずか1点の出土ながら早期中葉段階にはすでに遺跡地周辺で人間活動が開始されていたことを示している。なお、名和川を隔ててすぐ西側の丘陵上に位置する門前第2遺跡菖蒲田地区から、黄島式期の配石群が検出されている(中森・浜田・湯川2005)。名和飛田遺跡との関連が考えられるとともに、ある程度定着性の高い集団が周辺地域に居住していたことを示しているだろう。

早期末～前期初頭になると、極めて活発な遺跡利用が見られる。3000点を超える早期末～前期初頭の土器片が出土したほか、6000点以上出土した石器も大半がこの時期のものと思われる。遺物が大量に出土しただけでなく、数は少ないながらも遺構が検出されたことも重要だろう。これらの遺構がさらに調査地外に広がることも考えられる。周辺にはこの時期の遺物の見られる遺跡は少なく、出土遺物量も名和飛田遺跡には遠く及ばない。遺物量から考えて、名和飛田遺跡が拠点的な居住地としての位置を占めていたと考えられる(第6章第7節参照)。

前期前葉から後期前葉にかけて、遺跡の利用はきわめて低調となる。しかし、わずかながらも遺物が見られるので、遺跡周辺での活動が途絶えてしまったわけではない。名和川を隔てて対岸に位置する門前上屋敷遺跡では中期と後期前葉の土坑や土器が、また、門前第2遺跡菖蒲田地区では後期初頭の土器と土坑が見つかったが、ともに拠点的な居住を示すほどの内容ではない。名和飛田遺跡から名和川を約1.2km下ったところに、後期初頭の竪穴住居が検出された南川遺跡が存在するので、名和飛田遺跡や門前第2遺跡などはこうした拠点居住地から派生した遺跡の可能性が考えられる。

後期中葉には再び遺跡利用が活発となる。第3調査地だけでなく第2調査地でもかなりの遺物出土量を見たので、東谷川寄りにも活動域が広がっていたと思われる。調査範囲内では遺構は見つからないが、遺物量から考えて比較的拠点性の高い居住地として利用されていた可能性がある。後期後葉にもまとまった量の遺物が見られる。

晩期は前葉、中葉の遺物を全く欠いている。後葉には、突帯文土器の出土が見られ、遺跡利用は弥生時代前期へと継続していく。(北)

表26 名和飛田遺跡周辺集落消長表

	縄文時代					弥生時代			古墳時代			古代	中世		近世		
	早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期	前期	中期	後期		前期	後期	前期	後期	
名和飛田遺跡	■	■	■	■	■			■	■	■							
門前上屋敷遺跡								■									
門前第2遺跡		■							■	■	■	■	■	■	■	■	
名和中畝遺跡																	

■ 遺物のみ ■ 遺構少 ■ 遺構多

2. 弥生時代

弥生時代は前期から終末期までほぼ全時期の遺物が確認されており、継続的な遺跡利用があったことがうかがえる。竪穴住居などがつくられ、集落が形成されるのは中期後葉と後期前葉である。

中期後葉

中期後葉には竪穴住居2棟、竪穴3基のほか土坑などが見られる。竪穴住居4と竪穴住居5は、含まれる土器が同時期のものであること、住居の柱配置が同一で構造上に類似性が高いこと、隣接して造られることなどから、同一集団による居住が考えられる。ともに土器を使用した住居廃絶行為があったと推察されるのも興味深い点であろう。竪穴5は竪穴住居と規模があまり変わらないことや、周壁溝が見つまっていることから住居として機能した可能性がある。それ以外の竪穴は住居としての機能は考えがたい。遺構群は調査地外にさらに広がっていた可能性があるため、集落構造の全容把握には今後の調査を待たねばならないが、現状では、一つの単位集団によって居住された小規模な集落が形成されていたと評価しておこう。

中期の遺構からは特徴的な遺物がいくつか出土している。竪穴住居5出土の台付壺(318)は特異な器種である。完全に在地の土器製作技術によって作られているが、その器種の成立自体は在地の土器伝統に求められない可能性もあろう。廃絶儀礼に使用されたと考えられる出土状況とあわせて特殊なあり方を見せている。また、竪穴5検出面付近で出土した絵画土器(327)も重要であろう。壺の頸部に線刻画が描かれており、絵画のモチーフはシカと考えられる。線刻画は先端があまりとがらないへら状の工具で浅く描かれている。刻線の切り合い関係や粘土の動きから、角頭首・体部脚(前脚 後脚?)の順に描いたと考えられる(図168)。絵画土器は鳥取県内で6例目となり、貴重な発見となった(表27)。県内の資料には、名和飛田遺跡のほかにシカのモチーフが描かれたものが2例見られるが、他地域の絵画土器のモチーフに比べてシカの出現率が低い。類例が少ない現状では不明な点が多いが、今後資料が蓄積されれば、絵画のモチーフの地域的特色が指摘できるかもしれない(辻1999)。

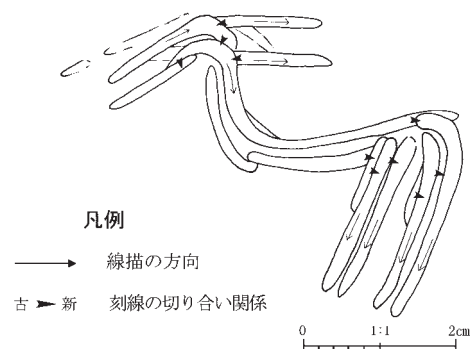


図168 線刻絵画

表27 鳥取県内出土絵画土器一覧

遺跡名	所在地	絵のモチーフ	土器の種類と個数	時期
名和飛田遺跡	西伯郡名和町	シカ	壺 1個体	中期後葉
茶畑山道遺跡	西伯郡名和町	魚(イルカ?)、船(?)	大型壺・広口壺 3個体	中期中葉
妻木晩田遺跡	西伯郡大山町	羽根飾りをつけた人物、船(?)	壺?	中期後葉?
稲吉角田遺跡	西伯郡淀江町	シカ・樹木と銅鐸(?)・二つの建物・船と船をこぐ人物	大型壺 1個体	中期後葉
日吉塚古墳	西伯郡淀江町	羽飾りをつけ武器・盾を持つ二人の戦士	大型壺 1個体	中期後葉
青谷上寺地遺跡	鳥取市	シカ、サメ、人物、記号様の意匠など	壺・甕 22個体(記号文含む)	中期後葉~後期

弥生時代中期後葉の集落は周辺にも多く展開している。川向いの門前上屋敷遺跡では4棟の竪穴住居や土坑などが見つかっており、名和飛田遺跡と同様に一単位集団の居住による小集落が形成されていたと考えられている(森本編2005)。両遺跡は隣接して展開することから、強い関連性がうかがわれる。また、茶畑第1遺跡や茶畑山道遺跡、茶畑六反田遺跡など、蛇の川兩岸に展開する集落は周辺地域の拠点となるような存在であったろう。

後期前葉

後期前葉には竪穴住居が1棟造られる。建て替えにともなう拡張を一度行っている。拡張後の径は約7mで、比較的規模の大きな住居である。第3調査地C区の東端部付近で検出されており、さらに南側や東側に後期の遺構が展開していた可能性がある。包含層や南東方向から流下してくる溝1から多くの後期土器が出土したことから、さらに集落が広がっていたことが推測されよう。住居内からはガラス小玉が18点、石製小玉が1点出土した。住居内から出土する例自体は数多く見られるものの、出土数が非常に多い点で特筆されよう。後期前葉の集落は名和町域では数が少なく、押平尾無遺跡や東高田遺跡にわずかな数の竪穴住居が見られる程度である。(北)

3. 古墳時代

中期末

第3調査地A区において、古墳時代中期末の竪穴住居1棟、竪穴1基、廃棄土坑などを検出した。古墳時代中期の遺構と遺物は、第2調査地と第3調査地A区の北東部に集中する。本遺跡の北方、東谷川右岸に所在する坪田遺跡では、明確な遺構は確認されていないが、古墳時代中期から後期にかけての遺物が散布している(岡野編2002、影山2002)。本調査地の東側の谷や、北方の坪田遺跡との間に古墳時代中期の遺構群が広がっている可能性も考えられる。

後期末

第3調査地E区において、竪穴住居2棟、竪穴1基、掘立柱建物4棟を検出した。これらの竪穴住居は、周辺遺跡の古墳時代後期末の一般的な住居と形態上は大差ないが、規模では大型といえる。

掘立柱建物1は本調査地では唯一全容がわかる大型建物である。掘立柱建物3は両桁側に柱穴列をもつ。掘立柱建物4は、梁行3間、桁行3間以上の規模を有する身舎に、三面ないしは四面に外周柱穴列がともなう。他地域の類例や先行研究によると、豪族の屋敷や祭殿のような、格上の建物に用いられた構造と評価できよう(第6章第9節参照)。

古墳時代後期末の遺構群は調査地のごく狭い範囲に集中し、まとまりをもった集落をなしているといえる。ただし、遺構群は調査地外にさらに広がっていたと考えられるので、集落の全容は不明である。竪穴住居、竪穴はいずれもTK209型式併行期のものである。掘立柱建物は時期を確実に限定できる状況にないものの、配置関係や建物の軸がいずれもほぼ揃うことから同時存在の可能性もある。竪穴住居2と掘立柱建物3との切り合い関係や、掘立柱建物1で陶器編年TK217型式の須恵器が出土したことから、TK209型式併行期の内に、名和飛田集落内で竪穴住居が廃絶され、続くTK217型式併行期以降には掘立柱建物が築かれたと考えられる。竪穴住居から掘立柱建物への移り変わりを一遺跡内で追うことができる。名和飛田遺跡での移行時期と比較できる資料は、周辺では見られず、今後の調査の進展を待たなければならない。古墳時代後期末の集落は、検出した掘立柱建物4などを積極的に評価するならば、一般の集落ではなく、特定階層にある集団の居住域であった可能性がある。

竪穴住居2・3、竪穴2からは、多量の遺物が出土した。竪穴住居2・3、竪穴2出土の土器類は、当地域における古墳時代後期末の土師器編年研究にとって、良好な一括資料になるだろう。また、住居3や竪穴2からは甑と移動式竈が出土している。山陰地方では、島根県安来平野や松江周辺での調査例から、一般に6世紀後半から7世紀にかけて移動式竈が普及することが明らかにされ

ており、住居内での煮沸・炊飯形態の画期と考えられている（岩橋2003）。名和中畝遺跡の竪穴住居（加藤編2004）と共に、古墳時代後期の当地域での炊飯・煮沸具のあり方の一端を示す好資料を得られた。また、両住居から出土した彩色記号を施した須恵器や、竪穴住居3での有茎三角式鉄鏃・有茎腸挟柳葉式鉄鏃、ミニチュアの手づくね土器などは竪穴住居廃絶時に祭祀が行われたことを窺わせる遺物である。これらの遺物の住居からの出土は一般的ではない。周辺遺跡には見られない住居廃絶祭祀の一端をうかがえる貴重な資料が得られた（第6章第8節参照）。（日置）

4．中世

第3調査地からはピットが35基検出されている。これらは建物を構成する配置をとらないため、性格は不明である。このうち7基からは、平安時代末～鎌倉時代のものと思われる土師皿や鉄刀、鉄滓などが出土している。意図的にピット内に埋納した可能性が高く、地鎮などの祭祀的行為が行われた可能性がある。調査地内からは建物が検出されず、中世の名和飛田遺跡の利用がどのようなものであったのかは不明である。対岸の門前上屋敷遺跡では区画溝や柵列などが検出され、屋敷地が形成されていた可能性が指摘されている（森本編2005）。本遺跡はこの門前上屋敷遺跡と密接な関連をもつものであった可能性が極めて高い。（北）

今回の調査によって、本遺跡では、極めて長い期間にわたって、ほぼ絶え間なく人間活動が行われてきたことが明らかになった。縄文時代には拠点的な居住地として利用された時期があり、弥生時代、古墳時代には集落が形成されている。このように、名和飛田遺跡における遺跡利用の継続性の高さを明らかにしえたことも重要であろう。こうした遺跡の継続性は遺跡の立地と深くかかわっていた可能性があるだろう。遺跡は中規模河川の名和川と小河川の東谷川の合流地点に位置する。丘陵とその開析谷で構成される地形の多い周辺地域の中では、沖積地が発達したまねな地域と言える。縄文時代にはこうした地形が内水面漁労の最適地となっただろう。弥生時代以降には、この沖積地が農耕活動に適した場所となったことは想像に難くない。名和川下流域の土地利用の歴史を考える上でも、重要な成果が得られた。

以上のように重要な調査成果が多く得られたにもかかわらず、本報告ではそれを十分に評価し、提示することができなかった。調査報告者の力量と努力の不足を恥じる次第である。

最後になりましたが、発掘調査や整理作業に従事していただいた作業員や整理作業員の皆さん、発掘調査に協力して下さった地元の皆さんに深く感謝いたします。（北・三木・日置）

【引用参考文献】

- 岩橋孝典2003「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について」『古代文化研究』第11号 鳥根県古代文化センター
岡野雅則編2002『坪田遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書79（財）鳥取県教育文化財団
影山和雅2002『坪田遺跡発掘調査報告書』名和町文化財調査報告書第29集 名和町教育委員会
加藤裕一編2005『名和中畝遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書103（財）鳥取県教育文化財団
辻信広1999『茶畑山道遺跡』名和町埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
中森祥・浜田真人・湯川善一2005『門前第2遺跡（菖蒲田地区）』鳥取県教育文化財団調査報告書106（財）鳥取県教育文化財団
森本倫弘編2005『門前上屋敷遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書105（財）鳥取県教育文化財団